

記憶に残る夏を

何だ、この人の波は！夕日を背に続々と人が押し寄せて来る。4年ぶりに開催した夏祭り会場は、過去最高の3千5百人を超す人々で埋め尽くされた。

ステージでは、かわつ太鼓、チアリーディングに始まり、幼稚園、小学校、一中、東高、女子高、島大の児童生徒たちの演奏やパフォーマンスが続く。一方、会場の一角に設け



られた「子どものあそびコーナー」では、ミニSSLが走り、スーパーボール掬いやストラックアウトなどに、子ども達が群がり歓声をあげる。

川津は幼稚園から大学まで揃った文教地区だ。夏祭りのステージは従来から子ども中心に構成してきたが、近年「子どものあそびコーナー」の充実で、子ども達の来場が急速に増えてきた。今回、幼児から高校生までの来場者は、千人をはるかに超えたと思われる。

ここ松江でも少子化は深刻である。昨年の出生数は僅か千4百人に過ぎない。未来社会は、数少ない子ども達の健やかな成長にかかっている。もとより子ども教育の中心は学校と家庭にあるが、加えて今地域の力が求められている。地域にできることは、幼少期に様々な体験を提供することに尽きる。

多感な時期に体験した様々な感動の記憶が、将来、育った地域への熱い想いに繋がることを、私達は知っている。そして、かつて地域の大人達が、自分達に注いでくれた温かな眼差しを思い出す時、彼らの地域社会への想いは一層強くなるに違いない。

この夏「小学生の居場所づくり事業」では36のプログラムを提供し、延べ7百人の子ども達が公民館に集った。これらのプログラムに加えて今回の夏祭り、子ども達の記憶に長く残れば幸いである。

